

JC宮崎ブロック大会 県内の魅力知り、発信を



在来野菜の活用を呼び掛けた永松さん



食の機能性や安全性の数値化を勧めた水光さん



「クラシック宮崎神話物語」の一場面

宮崎の未来を創造

講演会や神話劇

1/3 在来野菜 宮崎のブランド品に

日本青年会議所（JC）九州地区宮崎ブロック協議会（木村浩三会長）は10日、延岡市の野口記念館で「宮崎創造フォーラム」を開いた。「宮崎を想像し未来を創造する」故郷はみんなの愛でつくられた「在来野菜」に、食に関する講演会と神話をモチーフにした劇を上演し、「県内の魅力をみんなが知り、発信できるようにしよう」と呼び掛けた。

講師は、在来野菜の活 公立大学教授と、食品の「食の安全分析」 宮崎大学教授。用に取り組む水松敦宮崎 栄養や安全性を数値化し「ンター」代表の水光正仁 県内の在来野菜は高岡

町の鶴岡カボチャ、延岡市の内藤ワカシ、高

千穂町のアカバナインゲンマメ、美郷町のイラカブなどがある。永松さんはこれらの価値を高めるために「道の駅の活用・充実」や「オール宮崎での取り組みを」と強調。「道の駅で陳列する時に

調理法を添え、レストランで実際にその料理を出して見本を示せば購買意欲が増す」と勧めた。水光さんは、県内特産完熟キンカンの皮に体の

免疫力を高める成分が多く含まれていることや、強い日差しを浴びて育った県産ピーマンはビタミンCの含有量が他県産より多いこと、また、これ

らの数値を表示した商品は値段を上げて売れた。などの実験結果を示し、県内の食の価値を高めるために、同センターの活用を勧めた。

劇は「クラシック宮崎神話物語」達初編。「三ノミコトとコノハナサクヤヒメの出会いから出産までの物語を歌、バレ

エ、ナレーション、映像でつづった舞台作品で、シンガー・ソングライター鈴木重徳さんやアチ・フルミエールバレエの井上祐希さんらが出演。これらの神話が県内を舞台としており、県内には神話に基づく事跡が多くあることを印象づけて、フォーラムを締めくくった。同フォーラムは、県内9JCの会員約300人が一堂に集う「第44回宮崎ブロック大会」の一環で開かれた。

ふるさとエッセイ 郷土文化の担い手たち

宮崎県民俗学会会長 原田 解

2

花と絵のある図書館



昭和25年ごろの中村地平さん

今年で生誕100年のメモリアは、「北の太宰、南の地平」と呼ばれる郷土文化の担い手たち、井伏鱒二の門下の逸材

として知られていた。

しかし、長引く戦火のため肝心の文学活動を、しばらく休まなければならぬ状況に置かれ、そのため二人は北と南の風土を舞台にした、新しい創作活動に励むことになる。しかし、時代は暗くて長いトンネルの中に入って行き、やがて敗戦という悲劇的な結末を迎える。

私が父の紹介で初めて中村地平さんに出会ったのは戦後間もなくの昭和22年の初夏で、まさに「カオス時代」の真っただ中だった。

私はその3年後、県の職員として図書館勤めをする訳だから、これは筋書きの無い人生ドラマの序章と言ってよいだろう。

そうした環境の中で中村館長は「花と緑の図書館」をキャッチフレーズにした、幅広い文化活動を

早くもスタートさせ、その周囲には作家や詩人はもちろんのこと、音楽家や演劇人たちも実に多彩で、しかも他とは色合いの違った人脈を形作っていた。

銀行家の家系ということもあって経済界や実業界にも顔が広がった。とりわけ館長を主軸にした図書館グループでは、自動車文庫の開設や婦人読書会の立ち上げなどの、目新しい企画を巡って館員たちが夜ごと語り合い、県庁横の居酒屋で焼酎を酌み交わしていた。

遅ればせながらその仲間に加えて貰った私も、そうした熱っぽいやり取りに夢を膨らませていた。このような戦後の乏しい暮らし

だったが、新しい息吹を感じさせる希望の緑もまた確実に芽吹いてきていた。それが「宮崎管弦楽団

発足」の特筆すべき「事はじめ」だった。これまで一周遅れのランナーに例えられていた宮崎県民にとって、恐らくこれほど明るいニュースは無かっただろう。

因みにこの次の年に「群馬交響楽団」の誕生を描いた「ここに泉あり」という映画が製作され話題を呼んでいる。こうしたことからこの「事はじめ」がいかに嬉しい希望の灯りであったか、また意欲的な取り組みであったかがよく分かる。

一方、こうした新しい文化運動を提案し何かとバックアップしたのが、中村館長や宮崎大学の初代学長だった高橋隆道さんの知識人だった。こうした経緯で「宮崎管弦楽団」が産声を上げるようになったのである。

北の太宰、南の地平

共に井伏鱒二門下の逸材